コレンテ　vol. 44　n.395　ottobre 2023

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

AC ミランアカデミー愛知　特別寄稿

＊サッカーで愛知とロヴェレートをつなぐ、思いの架け橋＊

山田　晃裕

国籍の異なる誰かと、サッカーと言語でつながる喜びを知ってから何年が経つだろうか。たくさん学んで、スペインとイタリアを中心にヨーロッパを旅して、数えきれないほどの友情を育んだ。

私の仕事はサッカーコーチ。愛知県を拠点に、日本初となる AC ミランの公式アカデミーで、本国から派遣されてくるイタリア人コーチの通訳としても活動している。

もともとはスペイン語しかできなかったわけだが、12 年も仕事としてひとつの言語を使い続けていると、イタリア語もだいぶ板についてきたと実感する。

イタリア留学の経験がなく深いルーツがないゆえか、イタリア人からも不思議なアクセントだと笑われる。ある人からはミラネーゼ、別の人はブレッシャーノっぽいねと。エミリアロマーニャ訛りと言われたこともあった。

日々フィールドの中で向き合っているのは、伸びしろたっぷりの子どもたち。サッカーを教えるだけがすべてではなく、国際感覚を養うための環境作りも主要ミッションのひとつである。未来の日本社会を思うと、その重要度は日に日に増しているように感じる。

組織の中で唯一イタリア語を扱う人材として、サッカーと言語で誰かとつながる喜びを、未来ある若者たちに伝えることは私にしかできない使命だ。

もちろん、学びの場は日本だけに限らない。海の外の世界を見せることも、私たちだからこそできること。

教え子を対象としたイタリア遠征の企画実施回数は 20 回を超え、渡航した教え子の人数は 250 名を超えた。

毎年 Pasqua にはトレント県ロヴェレートで行われる国際大会 “Torneo Internazionale Città della Pace” に出場してきた。

初めての出場は2012年。イタリア人コーチに言われるがままに企画して、子どもたち 12 名（みんな10歳）と同じく右も左も分からぬままの渡航だった。

しかし何より衝撃を受けたのは、街を挙げてのおもてなしムード。たった2日間の大会なのに、人口4万人にも満たない小さな街でホスピタリティが爆発する。

開会式では緊張ガチガチの中で国歌を斉唱。万雷の拍手をもらってホッとした表情を浮かべる。その後、大会開幕を祝うパレードで市内を練り歩くのだが、たくさんの人が手を振ってくれると、子どもたちの表情が一気にほころぶ（これは以降も毎年のこと）。

到着してしばらくは「言葉がわからないから」と心配ばかりを口にするのだが、彼らに内在する「言語の壁」を叩き割ってくれるのが、ロヴェレートの人々のホスピタリティだ。

いつの間にか自分の人生に欠かせないものになっていた。Pasqua を祝う習慣こそないけれど、Pasqua ムードのイタリアを自分の体が求めている。

顔馴染みも増えて、私自身がこの大会の名物キャラとしても認識されるようになってきたのだが、このつながりはコロナ禍により一時的に失われることになる。

2020 年 3 月、渡航準備も終盤に入った頃に企画催行を断念。イタリアも当時初めてのロックダウン状況下にあったため大会自体も中止となったが、オンラインミーティングにゲストとして参加した。

「必ずカムバックするから」と伝えると、「海の向こうで待っている。日本からのゲストなしにこの大会は語れないから」と力強い言葉をもらった。お互いに強く惹かれあっているのを実感したのはこの時。カムバックを果たすまでは死ねないと本気で思った。

結局、この約束を果たすまで丸 3 年を要することになる。2023 年 4 月、子どもたち 15 名と関西国際空港を出発しておよそ 30 時間（航空事情はなかなかこちらにとって好転せず）をかけて、私たちはトレント県へ帰ってきた。

ミラノ・マルペンサ　国際空港を出てすぐ、Autostrada A4 名物の渋滞に巻き込まれてしまい到着は夜となったが、翌朝岩のゴツゴツとした山並みを見て帰ってきたなぁと、しみじみしたものだ。

トレンティーノ名物に舌鼓を打ったり、地元クラブと試合を組んだりして調整すること2日。国際大会の開会式の日を迎える。

舞台となるのは、ロヴェレートの丘の上にある “Campana dei Caduti” 広場。

バスを降りた次の瞬間からたくさんの人が「待っていたよ」「おかえり」と声をかけてくれる。それだけでも胸がいっぱいなのに、会場に足を踏み入れると、拍手が沸き起こった。

39 年の人生においても感じたことのない温かみのある拍手。所定の位置に着くまで 20 秒ほど続いただろうか、もう涙を抑えることができなかった。

運営スタッフの皆と挨拶を交わす。“Riabbracciamoci”がキーワードになっていたのだが、抱擁のたびに念願が叶ったよろこびを噛み締めることができた。

3 年に及ぶ苦渋の時が作り上げた心の穴も、つながりを持つ仲間とのハグひとつで埋まっていくということを知った。

2023 年の今大会が、運営側としてもあらゆる規制を解除して開催する初めての大会。国歌斉唱からパレードまで、日本から連れてきた子どもたちもとことん楽しんだ。

カムバックはプレー面でも思わぬ効果を生んだのか、4 年ぶり 9 回目の出場で初めて決勝リーグに進出。U-11 カテゴリーで 4 位という好成績を収めた。

この大会には脈々と受け継がれるものがある。それは「人の思い」だ。大会を支えるのは地元の高校生を主体としたボランティアたち。

およそ 150 人を超える大所帯で、3 ヶ月におよぶ選抜＆研修プログラムを経て 2,500 人のアスリートが集うスポーツの祭典を動かしている。実行委員会の中核をなすメンバーの多くもこのボランティア上がり。

10 代の頃の貴重な経験が生きて、その思いをつないでいこうと頑張っている。若かりし頃のたどたどしいトークやヒゲが生えていなかった頃の姿を知っているので、ビジネスなのにどうしても親戚のおじさん気分で接してしまうのはここだけのハナシ。

もちろん我々の組織にも循環は生まれつつある。お兄ちゃんが参加した大会から 5 年後に弟が参加するってこともあった。参加した子どもたちがコーチになり、この大会でベンチから辣腕を振るう日も近いかもしれない。

“Buona Pasqua”という心地よい響きが自分の体に返ってきた 2023 年の春を、私は一生忘れはしないだろう。

最後に近況報告として追記。

9 月 10 日、過去最速で 2024 年大会への招待が届いた。いつもは年末あたりが定番なのに。

「カムバックは果たしたわけだし、女子チームとか新しいサプライズ持ってきてよね」とまさかの追加リクエストまで！

次は節目となる 10 回目、愛知とロヴェレートをつなぐ架け橋はまたその橋長を伸ばそうとしている。そしてその中核を担う私は骨の髄までこの大会に愛されているとしか思えない。

（AC ミランアカデミー愛知）

カルヴィーノとアーティチョーク 44

＊はるかなるサンレモ（1）＊

堤 康徳

サンレモは予想以上に遠かった。2023 年 8 月 6 日朝、羽田からミュンヘン経由でフィレンツェに向かった。フィレンツェに 2 泊してからサンレモに行く予定だった。ところが羽田出発が 2 時間遅れ、乗り継ぎに間に合わず、ミュンヘンで 1 泊するはめになった。6 日 21 時頃フィレンツェ空港着の予定だったのが、翌 7 日午前 9 時過ぎの到着となった。ジェノヴァ空港からの方がサンレモまでは近いが、東京・ジェノヴァ便は飛行時間や乗り継ぎの面で難があったため、なじみのあるフィレンツェ経由のルートを選んだのだった……。いずれにせよ、旅程全体には大きな影響はなく、7 日、イタリア留学中の学生たちとフィレンツェ中心街で夕食をともにし、予定どおり翌 8 日早朝、ひとり列車でサンレモに向かったのである。ジェノヴァ経由の鉄路の旅は 5 時間以上に及んだ。

サンレモに行ったのは、カルヴィーノの生誕百年にあたる今年、ぜひとも作家の出身地を訪ね、ゆかりの場所を歩いてみたかったからだ。

サンレモ駅を降りて、駅前を東西に走るカヴァッロティ大通りを東に 10 分ほど歩いたところに予約したホテルがあった。お世辞にも快適な宿とはいいがたいが、遠路はるばる訪れた私に、海の断片が見えるベランダつきの部屋を用意してくれた。海岸までの距離は 100 メートルたらず。

イオニア海に面する気候温暖なサンレモの、とくにこのカヴァッロティ大通り沿いには、美しい庭園をもつ別荘が立ち並ぶ。そのひとつがノーベル邸(Villa Nobel)だ。ノーベル賞で知られるアルフレッド・ノーベルの別荘である。1871 年に建てられた瀟洒なこのヴィッラを、ダイナマイトの発明で財をなしたノーベルが購入したのは 1891 年のこと。地下に化学実験室を設け、研究活動も続けた。北欧の厳しい冬を避けてサンレモに移り住み、晩年を過ごしたノーベルは 1896 年この地で亡くなっている。現在ノーベル邸は、博物館として一般に公開されており、私もここを訪れて初めて、ノーベルがサンレモで死去したことを知った。ベランダからの光景がすばらしかった。緑の芝生が広がる庭の向こうには、港に停泊するヨットのマストが見える。

【ホテルからの眺め。ビール瓶の上あたりに海が見える。】

避寒のためにサンレモに移住したのはノーベルだけではない。ノーベル邸の西側には、やはり 19 世紀末にスイスの実業家オルモンドの購入した邸宅(Villa Ormond)がある。その広大な庭園の一部(カヴァッロティ大通りをはさんで南側つまり海側)は現在、ノーベルの名が冠せられた公園(Giardini Nobel)として市民の憩いの場となっている。真夏でも、ヤシ、ユーカリなどの熱帯植物が強い日差しをさえぎるように枝を高く広げ、木陰では快適に読書ができる。地面に垂れる巨大なリュウゼツランの重々しい葉、ジャカランダの鮮やかな青紫の花に目を奪われ、水と戯れるプットの噴水を見ているだけで涼やかな気分になった。

サンレモに多々ある公園とその植物たちは、とくにカルヴィーノの初期の小説の着想源となったにちがいない。第一短編集『最後に鴉がやってくる』(1949 年)所収の短篇「魔法の庭」*(Il giardino incantato)*に描かれた庭は、ノーベル公園を思わせる。この作品は、カニ獲り行った少年と少女が、海沿いの美しい庭に入り込む、ある種の冒険

譚である。出だしを読んでみよう。

ジョヴァンニーノとセレネッラは線路を歩いていた。眼下には、暗い青と明るい青のうろこで覆われた海が広がる。頭上の空には、白い筋状の雲がかすかに浮かぶ。レールは光り、やけどしそうなほど熱かった。線路は歩きやすく、いろんな遊びができた。彼がバランスをとりながら片側のレールを、彼女がもう一方のレールを、手をつないで進んでいった。

そこへ突如、転轍機の円盤が跳ね上がり、汽車の到来を予告する。この当時、鉄道はサンレモ海岸沿いを走っていた。フランスと国境を接するヴェンティミッラとジェノヴァを結ぶ鉄道路線が開通したのは 1872 年のこと。サンレモが避寒地として国内外で人気が高まったのは、この路線の開通によりこの町へのアクセスがよくなったことも一因であろう。2001 年、複線化のため、線路が山側に移設された。これにより、現在のサンレモ駅は奥深いトンネルのなかにある。海沿いの古い線路あとは、自転車歩行者専用道路として整備された。私もサンレモ滞在中、毎朝この道を散歩した。

【Giardini Nobel の噴水】

ジョヴァンニーノは、海側と山側のどちらに逃げるか一瞬迷う。海側には、とがった葉が放射状に広がるリュウゼツランが、山側には、葉だけがしげる花のないヒルガオの生垣があった。彼がその生垣に細い通路をみつけ、ふたりは蔓の下のめくれあがった金網をくぐりぬけて、見知らぬ庭の片隅に出る。ふたりにとって、ユーカリの大きな古木が天に伸びるその庭は、秘密の楽園であった。

すべてがすばらしかった。ユーカリの丸みを帯びた葉の茂みと空の断片が描く穹窿。心のなかにはあの不安だけがあった。庭は自分たちのものではなく、今にも追い出されるかもしれない。だがまったく物音がしない。曲がり角のヤマモモの木からスズメの一群が、さえずりながら飛び立った。そしてまた静まりかえった。おそらく見捨てられた庭なのかもしれない。

ふたりはプールで泳いだり、卓球をしたり、勝手におやつを食べたりして、つかの間の冒険を楽しんだあと、邸宅にそっと近づき、鎧戸の桟と桟の隙間から、青白い少年をのぞき見る。少年は病気なのか、夏なのに襟の高いパジャマを着ている。部屋の壁には蝶のコレクションが飾られ、少年はそのガラスケースの縁をやさしく撫でていた。ジョヴァンニーノとセレネッラは、青白い少年を見ているうちに恐怖を抱き始める。「それは、その邸宅と庭、美しく快適なものすべてに、かつて犯された古い不正のように重くのしかかる、何かの魔法にたいする恐怖だった」。ふたりは、楽園から追放される前に、自ら黙ってその庭を離れる。そして、リュウゼツランのあいだの小路を通って浜辺にもどり、海藻を互いの顔にぶつけ合う遊びに暗くなるまで興ずるのだった。

蝶のコレクターである邸宅の主人も、ジョヴァンニーノたち庭園の闖入者も、庭の美しさを心ゆくまで味わうことができない。あまりにも美しすぎて、現実とは思われない。明朗で牧歌的な世界に影を落としているのは、そのような不安感である。魔女によって蟇蛙に変身させられていた若者が、その魔法を解いて本来の美しい姿を取り戻すというストーリーは、昔話によく見られる。それとは逆に、魔法にかけられたかのように美しい庭園は、魔法が解けたとき、あとかたもなく消えてしまうのだろうか。

「魔法の庭」は、主人公のふたりが、禁断の果実を食べる前の、すなわち性の意識が芽生える前のアダムとイヴを思わせる点で、そして舞台が植物の生い茂る庭である点において、『最後に鴉がやってくる』巻頭作「ある日の午後、アダムが」

(*Un pomeriggio, Adamo*)に通じる。ただし、「ある日の午後、アダムが」は、カルヴィーノが 22 歳まで家族と暮らしたメリディアーニ邸の庭が物語の舞台と考えられる。メリディアーニ邸は、父マリオが所長を務める花弁栽培試験場とカルヴィーノ一家の住居を兼ねていた。

「ある日の午後、アダムが」の主人公は、15 歳の庭師リベレーゾ(カルヴィーノの幼なじみ、リベレーゾ・グリエルミがモデル)と、14 歳の家政婦マリア＝ヌンツィアータ。ふたりの生活環境は対極的である。少年の名はエスペラント語で自由を意味し、少女の名は誕生日が受胎告知の日であることにちなむ。リベレーゾが語る彼の父は、息子と同じく長髪で、菜食主義者であり、エスペラント語を話し、無政府主義者の地理学者エリゼ・ルクリュの本を息子たちに読み聞かせている。一方、カラブリア地方出身の少女は、兄弟が多くて貧しいベルガモット農家に生まれ、カトリックの信仰とともに育っていることが読み取れる。自然児のリベレーゾは、蟇蛙、ハナムグリ、蛇、カナヘビ、金魚など、庭に生息するさまざまな小動物を少女にプレゼントして彼女の気を引こうとする。それらの生き物を気味悪がる少女も、少年本人には関心をいだくようすがうかがえる。結局、少年は台所にしのびこみ、生き物たちを食器や鍋に入れて少女への置き土産にする。これが物語のあらすじである。こちらの短篇には、「魔法の庭」に影を落とす不安感はなく、熟知した庭で自由気ままにふるまう少年の開放感がきわだっている。

イタロ・カルヴィーノは、1923 年 10 月 15 日、キューバの首都ハバナに近い、サンチャゴ・デ・ラス・ベガスで生まれた。サンレモ出身の父マリオ・カルヴィーノは農学者、サルデーニャ島出身の母エヴェリーナ(エヴァ)・マメーリは植物学者だった。革命期のメキシコに長らく暮らしたマリオが、農業試験場の所長としてキューバに移住したのは、17 年のことである。25 年、マリオは故郷サンレモに帰り、新たに設立された花弁栽培試験場の所長となった。こうして、サンレモ市街と海を見下ろす邸宅の 3 千平米に及ぶ広大な庭は、パパイアやグアバなどの熱帯原産の植物で埋め尽くされることになった。

1927 年には、のちに地質学者となる弟のフロリアーノが生まれている。「科学だけが立派な学問」とみなされた科学者の家系のなかで、唯一文学の道に進んだカルヴィーノは、自らをやや自嘲気ぎみに「黒い羊」と評したことがあった。

カルヴィーノが子供の頃のサンレモは、イタリアのほかのどの都市ともことなり、「世界各地から来た風変りな人々の住む」町だったという。また彼の家族は、「サンレモのみならず、当時のイタリアではかなり異色であり、科学者、自然の愛好者、自由な考えの持ち主だった」(『パラドッソ』誌 1960 年 9 月-12 月号)。

木のぼり男爵一家の暮らすオンブローザ邸のモデルも、メリディアーニ邸かもしれない。主人公のコジモは、カタツムリ料理を食べるのを拒否して、うっそうと枝を茂らせる庭のトキワカシの大木によじ登り、樹上生活者となったのだ。

1951 年のマリオの死後、メリディアーニ邸の広い庭の一部に集合住宅が建てられた。『木のぼり男爵』と同じく 1957 年に発表された中篇『建築投機』(*La speculazione edilizia*)には、このときのカルヴィーノ一家の事情が反映されている。主人公クイントは、サンレモとは明記されていないが、セメント熱(La febbre del cemento)にとらわれたリヴィエラのある町に帰郷する。「そこはかつて、ユーカリとモクレンが木陰を作るいくつもの庭に囲まれた町だった」。クイントは、父の死後、臨時資産税と相続税を支払うため、庭の一部を売却する決断を下したのだった。

メリディアーニ邸が完全に売却されたのは、1978 年の母エヴァの死後である。私も邸宅まで足を運んでみたが、門の中には入れない。アパートが数棟立っているようだ。左右の門柱にそれぞれ、LA VILLA と MERIDIANA の文字が書かれた石板がはめこまれていた。

変わりゆく故郷の風景をカルヴィーノはどんな目で眺めていただろうか？

(上智大学准教授)

編集・発行 /(公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL:(075)761-4356/FAX:(075)761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/